



紫式部絵図 大塚春嶺作

同窓会報が送られてきました。巻頭の『『光る君へ』の輝き』という誌上講演の挿絵(左)に魅了されました。渋めの十二単を着こなしている、上品で美しい紫式部の姿にうっとりしてしまいました。

私にとって『源氏物語』は高校の国語のテキストでしかなかったので、紫式部は遠い存在でした。「桐壺の巻」の冒頭の1ページを舐めるように読まされて、試験では点を稼げるように教えて頂いたのですが、内容に関してはほとんど無知のままでした。

アメリカン大学での夏期講習の折に、世界最古の小説家は Lady Violet と聞いてピンと来ず、紫式部のことだと知ってびっくりした記憶があります。もはや、原文に取り組む気力はなく、とりあえず漫画の「あさきゆめみし」を一気読みして、お茶を濁しておりました。

同窓会報の講演者は『源氏物語』を熱心に研究されて、紫式部の実像を「空蝉」に重ねて迫ろうとしておられます。テレビ・ドラマ「光る君へ」が放映され、人気が出ているようですし、紫式部に関する情報が流れるようになってきました。となると、私もふと思い出します。

母が娘時代から稽古していたお琴の相手になるようにと命じられて、箏曲を習い始めたのが私が50歳くらいの頃でした。母との合奏は実現しませんでした。これまで全く知らなかった邦楽に触れることができたのは幸いかもしれません。ある時、師匠が手事だけでなく、地歌も歌いなさいと命じました。母が好きだった「千鳥の曲」(吉沢検校作曲)でしたので、歌って見ようかななどと思ったものの、トンでもない!。どのように発声したらいいのか、皆目見当がつかませんでした。これが最初でした。全く音が取れず、唸ったり、ひねったり、引きつったりする珍妙な発声作業を、師匠は「そう、そう」と言っただけで、意に介さず先へ進みます。慣れていくしかないのだろうかと思いつつ、不毛な作業が続きました。この曲は『源氏物語』の「須磨の巻」の海の嵐に関係しているとのことですが、それどころではありませんでした。

その後に「黒髪」(湖出市十郎作曲)も習いました。歌詞は「黒髪…解けて寝た夜の〜〜〜一人寝る夜の」という男女の性愛の移ろい、儂さ、そして時の流れの無情さを歌ったもののように感じ、『源氏物語』とは関係ないと知りつつ、いにしえの平安時代の女の姿をイメージできるような気がしました。

やがて、「夕顔」(菊岡検校作曲)に挑戦。歌詞は哀れな「夕顔」を想起できるもので、悲しい侘しい、けれども美しい風情を歌います。この時、初めて『源氏物語』の内容の一端に触れたような気がしました。儂い恋のやるせない顛末を、歌詞は美しく歌っています。私は悪戦苦闘の連続でした。楽譜は縦書きで、音符は「一〜十・斗・為・巾」の記号ですが、琴の曲と地歌の曲は別々で、弾き語りになります。地歌はこぶしオンパレードです。ボイスレコーダーに小さく、フレーズ毎に、地歌の音を録音し、それを聞きながら何度も発声してみて、琴に合わせるという練習を重ねましたが、挫折してしまいました。思い返すとこれが私の小さい『源氏物語』体験です。